



TITLE:

沖縄における「伝統芸能」と生涯学習・社会教育

AUTHOR(S):

渡邊, 洋子

CITATION:

渡邊, 洋子. 沖縄における「伝統芸能」と生涯学習・社会教育. 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究 2008, 7: 63-81

ISSUE DATE:

2008-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66093>

RIGHT:

沖縄における「伝統芸能」と生涯学習・社会教育

渡 邊 洋 子

'Traditional Performing Arts' and
Lifelong Learning/Social Education in Okinawa

Yoko WATANABE

はじめに — 研究の構想と本稿の位置づけ

本稿は、『『伝承・習い事』文化における学習様式と生涯学習の現代的課題に関する比較研究』¹⁾の一端を担うものである。同研究の基本課題は、(1) 主に日本・中国・韓国という東アジア諸社会における「伝承」文化（祭祀や伝統芸能など）と「習い事」文化（書道や手工芸など伝統的実技の習得に関わる文化、日本で言えば「芸道」「遊芸」などの流れを引くもの）に着目し、それらの学習様式（伝達・伝授および継承・習得の様式）に通底する基本原理と諸要素を抽出すること、(2) グローバリゼーションの下での人々の生活と生涯学習の諸課題が、それらの文化の存続・変容をめぐるダイナミズムにいかに関結しているかを比較考察すること、の二つである。

近年のグローバリゼーションの潮流は、人々の経済生活のみならず、その地域生活や地域文化のあり方にも大きな影響を及ぼしており、それゆえに地域生涯学習をも大きく規定してきた。現在、地域や生活に根ざした文化的価値の多くが、欧米、特にアメリカ中心の「グローバル」な文化に取って代わられる一方、その流れに抗しつつ自らのアイデンティティを際立たせようとする文化的な動きも各地に生まれている。文化的な単一化・画一化を推し進める大きな流れの中で、日本・中国・韓国をはじめとする儒教圏の地域で培われてきた「伝承」「習い事」文化は、いかにしてその独自性をまもうととし、またいかに時代に適応すべく変容してきているのか。また、欧米型の学習プロセスや学習スタイルとは異なる原理や伝達様式、習得様式を培ってきた同地域の伝統的な「学び」は、その独自性をどう維持・発揮しようとし、グローバリゼーション下の生涯学習の現代的諸課題にいかに対応しているのか。

これらの様相は、各々の社会における今後の生涯学習の発展の方向性を示唆するものと言える。と同時に、欧米モデルの単純な適用ではなく、一国主義的な発想によるのでもなく、これらの地域を「東アジア」という生活圏で捉えていく試みは、人々の生活や地域に根ざした生涯学習のあり方を模索していく上で、重要な示唆を得られるものと考えられる。

本研究では、歴史的・政治的・社会的・文化的にかなり異なる背景を有するが、いずれもゆたかな文化的土壌を有する三地域（京都・沖縄・新潟）を対象地域としている。グローバリゼーションの潮流の中で、独自の「伝統」や「文化」を、飽くまでも形を変えずに継承し存続させようとする京都、変化の波を自らの中に取り込みつつ、時代状況に応じて柔軟に「伝統」や

「文化」を更新しながら活力を養い続ける沖縄、そして、戦前から「日本海側の玄関」と呼ばれ、海外との交流地点でありながら、変化に向けた能動的な対応をも、独自の「伝統」「文化」の継承への積極的な志向をもそれほど顕著に見せていない新潟、との特徴づけを仮説的に行ったためである²⁾。これらの日本の調査基盤をもとに、次の段階の作業としては、中国と韓国の研究者の協力を得て三国間の比較研究に取り組むことを考えている。

本稿では、沖縄における「伝統³⁾ 芸能」を取り上げる。本研究に掲げた「伝承文化」とは基本的に、時代を経て世代間で引き継がれてきた地域の祭祀、年中行事、習俗、これらに関わる文化的な営みを指すが、伝統芸能はとりわけ、社会文化的風土に根ざして生成され、共有され、伝承・継承のプロセスの中で精練されてきた総合性をもった文化活動と捉えられる。本稿においては、県民に伝統芸能への関心が高く、ヤマトとは異なる独特の芸能観を有すると思われる沖縄を取り上げ、「伝統芸能の継承」に関わる取り組みを、生涯学習・社会教育における「機会」と「支援」という観点から考察する。

以下、1で、「沖縄県民意識調査」における「芸能」への意識に触れ、2で人々が「伝統芸能」に触れる機会を、3でその「継承」の場や機会と支援体制を、広義の生涯学習の観点から概観し、4では、1979（昭和54）年から2003（平成15）年まで25年間続いた沖縄県南風原町の民俗芸能交流会の取り組みを跡づける。その中で、人々にとっての「芸能」の意味を考察し、社会教育がその「継承」プロセスにいかなる役割を果たし得るかを考える手がかりを得たい。

1 「沖縄県民意識調査」にみる「芸能」への意識と文化的・社会的基盤

戦前・戦後を通じ、沖縄の人々にとって「芸能」は総じて身近なものと言える。現代の沖縄においても、少なくともヤマトと比較して「芸能」への親和度が高いことは疑い得ない。

例えば、2006（平成18）年に琉球新報社が「沖縄県民（ウチナーンチュ）の現在の物事の考え方や趣向を把握」し「県民意識の変容を分析する」目的で実施した「沖縄県民意識調査」⁴⁾の関連項目をみてみよう。そこでは「空手・琉舞・織物・工芸など沖縄の文化、芸能を誇りに思いますか？」との質問に対して、回答者の94.3%が「誇りに思う」と答えている。前回の2001年調査と比べても2.6ポイントの増加であり、66.6%の人が「とても誇りに思う」と回答した点が注目される。複数回答で「沖縄文化で好きなもの」を問うと、「三線・民謡」（74.4%）、「エイサー」（64.4%）、「舞踊」（53.2%）が前回同様に上位を占め、次いで「空手」27.8%、「芝居」（22.7%）、「古典音楽」20.9%、「文学・琉歌」（10.5%）などが挙げられている。同調査では、「近所付き合いの希薄化」や「行事離れ」の進行も指摘されている⁵⁾ものの、全体の8割を越える（84.8%の）人が「沖縄人としての誇りをもっている」と答えたように、「沖縄」「沖縄文化」への思いや愛着は近年、強くなっているように思われる。沖縄では多くの家庭に三線があり、冠婚葬祭はもちろん、折々に様々な場所で「歌う」「踊る」ことを楽しみ、「芸能」が生活の中に溶け込んでいると言われる。

以上からも示唆されるように、沖縄において「芸能」という言葉は、「文化」と同様、人々の意識の中に定着しており、その内実も「琉球芸能」とも呼ばれる沖縄の伝統芸能全般を指して用いられている。「村遊び」という言葉に示されるように、沖縄の芸能は人々の日常的な生

活や娯楽、ライフイベント、周囲の人々との関係性などと深く結びついている。それゆえに、沖縄における伝統芸能の伝承・継承は、老若男女を問わず、住民一人ひとりの自己形成や自己実現、他者との関係性の構築やコミュニケーション、さらにはアイデンティティ形成と切り離して考えることはできないと思われる。

ヤマトでは一般に、伝統芸能というと古典芸能が強くイメージされ、演じ手と観客が明確に分化し、一握りの「選ばれた」演じ手の名演を大多数の観客が特別な機会に観賞するものと捉えられがちである。他方、祭祀や伝統行事などと結びついた民俗芸能は概して、担い手不足・後継者不足に悩み、衰退・消失の危機にさらされている。一般の人々、とりわけ、若い人々にとって伝統芸能は「消えゆく過去の遺物」であり、関心や誇りをもつ対象とはみなされ難い。それに対し、沖縄では、特に若い世代の中に「芸能」への親しみや誇りが顕著に見いだされ⁶⁾、また伝承・継承への活気ある意欲的な取り組みが、さまざまなところで行われている。そこではなぜ、「芸能」がこれほど人々の生活に根ざし、それと密接に結びつき、独自の発展を見せているのか。また、沖縄の伝統芸能の存続・発展に関わって、どのような背景と要因、原動力が大きな影響を及ぼしてきたのだろうか。

もちろん沖縄でも、古典芸能の世界は演じ手と観客に分かれ、また民俗芸能の担い手問題も侮れない課題と言えよう。だが何よりも芸能が人々にとって身近な存在である、という基盤となる現実が大きく異なっている。沖縄では、古典芸能の観客が関心を深めて演じ手への道を探ることも特異なことではないし、民俗芸能も「衰退したものを復活させる」「なかった所に新たに創り出す」ということが、珍しくないためである⁷⁾。これらの背景となる沖縄の芸能を生成・存続・発展させてきたゆたかな文化的基盤と、それを側面から支援・援助・奨励してきた社会関係基盤にも、注目すべきであろう。

このような文脈の中で、伝承芸能の伝承・継承のプロセスやそこに介在する諸要因は、学習・教育といった近代的・限定的な概念で捉えきれぬものでないことは明らかである。だが、それゆえにむしろ、敢えて「学習」「教育」という観点から、その独自の価値の解明に取り組む必要があると考える。成人教育的な「学習」「教育」と同じ枠組で捉えきれない部分や要素は何か、またそれらの行為は「人が学ぶ（真似ぶ、慣れる）」「人に伝える（授ける、分かち合う）」などを含む習得や伝授の観点から見ると、どんなメカニズムとして「埋め込まれている」⁸⁾と見られるのか。これらのことが、飽くまでも沖縄の文化的土壌と地域的な背景の中で、再検討されるべきものと考えている。

では、広い意味での生涯にわたる「学習機会」という観点からみた場合、人々が、具体的にどのような機会に「芸能」に出会い、どのような形で関わっているのか、見ていこう。

2 沖縄の「伝統芸能」の展開をめぐる基本構図

沖縄における伝統芸能は大別すると、古典芸能と民俗芸能の二つに分けられる。

古典芸能（宮廷芸能）は、琉球王朝が中国からの冊封使⁹⁾を迎える際に、かれらを歓待するために宮廷で発達した古典音楽、古典舞踊、組踊（後述）が基本となる。琉球王朝以来の芸能をめぐっては、1879年の「琉球処分」で士族社会が崩壊し芸能が得意な士族たちによる商業演

劇が誕生したことで「大きく変容した」。「いわゆる沖縄芝居と呼ばれる商業演劇は、島々や村々の民謡を取り入れて、新しい芝居や舞踊を製作しつつ、古典舞踊や組踊等の宮廷芸能も継承してきた。そして、これら沖縄芝居役者の系統を引く数多くの琉舞研究所と流派が生まれた」¹⁰⁾。明治以降、沖縄芝居役者が創作したのが、民俗芸能や庶民の生活文化を取り入れた雑踊（ぞうよう）や歌劇である。また外来の芸能として、日本本土や中国から伝わったとされるチョンダラー（京太郎）、ターファーク（太花鼓）、獅子舞、フェー（南）の島棒などがある。

他方、民俗芸能は基本的に、人々の生活と密接に結びついて発達し、村々で独自に伝承されてきたものである。民俗芸能には、祭祀芸能、「庭の芸能」、バンク（仮設舞台）芸能がある。祭祀芸能は、「人間の力ではどうにもならない自然に対する畏敬の念、神様に対する祈りの芸能」であり、節祭、スツブナカ、マユンガナシなど個別の祭祀や、綱引きのように節目の日に祭の中で演じられる所作などが含まれる。そこでは「簡単な動作の中に、芸能の動作の原点がある」と言われる。「庭の芸能」は祭祀芸能から発展したもので、エイサーに代表される、独立性の強い野外集団舞踊を指す。さらに発展した形のバンク芸能は、「大勢の人が見やすいようにと、簡単な仮設舞台を作って、その上で催される芸能」¹¹⁾である。村遊び、多良間の八月踊、竹富の種子取、チョンダラーなどが現在も行われている¹²⁾。

通常、劇場などで琉球芸能が演じられる際には、これら宮廷芸能や創作芸能、雑踊、外来の芸能などが演目に取り入れられている。古典芸能は通常、足袋を履いて紅型や胴衣、カカンなどの琉球氏族の衣装をまとうて演じられ、雑踊は、素足で芭蕉衣などの庶民の衣装で演じられる。宮廷芸能のみを伝承する団体は、組踊保存会だけであり、現在においては「雑踊や歌劇は準古典芸能になっている」¹³⁾とされる。すなわち、格調高い宮廷芸能と島の暮らしを反映した雑踊の間に序列はなく、両者がともに、劇場を拠点とする芸能文化を構成しているのである。沖縄県民の意識調査において「芸能」の一言で、古典芸能と民俗芸能をともに含むものと受け止められていたのは、このような歴史的経緯も影響を及ぼしているものと思われる。

現在、琉球芸能が演じられる主な場所や機会としては、「国立劇場おきなわ」「沖縄県立郷土劇場」「沖縄市民小劇場あしびなー」など大小の公設劇場や各種の会館・ホール、「琉球舞踊館うどい」など有志による私設の舞踊館、首里城前広場を含む屋内外の舞台での公演、村々での祭祀や年中行事、学校行事やクラブ活動、全島の行事（全島エイサーまつりなど）、テーマパークでの常設公演（琉球村、おきなわワールド等）などが挙げられる。

この中でも、とりわけ「沖縄の伝統、文化を誇りに思う」の回答に影響を及ぼしているのは、2004（平成16）年1月の「国立劇場おきなわ」の設立であると思われる。同劇場は、都道府県の名称を冠した唯一の「国立劇場」であり、この意味で沖縄の伝統芸能の功績と「権威」とを内外に示す契機になったとも言える。1972（昭和47）年5月15日、沖縄返還にあたり、沖縄の代表的古典芸能「組踊」¹⁴⁾が国の重要無形文化財に指定された。だが、「組踊をはじめとする沖縄の伝統芸能を公開する専用の施設がなく、また、技芸の正当な伝承、伝承者養成、組織的な記録保存や調査研究、資料収集等を一元的に行う施設がな」¹⁵⁾かったことから、1981（昭和56）年4月、沖縄の芸能家たちを中心に、沖縄伝統芸能の保存振興の拠点施設「伝統芸能館の建設」要請運動が開始された。

以後、長期にわたって官民一体となった粘り強い運動¹⁶⁾が展開された。それが身を結んだのは、2002（平成14）年2月である。設置主体を独立行政法人日本芸術文化振興会、運営主体を地元関係者による財団法人国立劇場沖縄運営財団とする体制が確立され、同年4月「国立劇場おきなわ」の正式名称が決定された。同劇場の設立趣旨には、以下のように、沖縄の伝統芸能への取り組みに関わる総合的な展望を示されている。

沖縄の伝統芸能は、古典の御冠船踊と近代の沖縄芸能が〈伝統〉によって連続し進展してこんにちに至っているもので、沖縄伝統芸能の保存振興とその質的水準の向上発展を図るためには、組踊をはじめとするこれらの沖縄芸能全体を総合的に捉え、公開、伝承者養成、調査研究等を一元的に行うことが肝要である。また、沖縄の伝統文化は、日本本土を含むアジア・太平洋文化圏と密接に関連しながら成長・発展を遂げてきたが、こうした地理的・歴史的特性を活かし、沖縄がアジア・太平洋地域と日本との文化交流の拠点となることは、沖縄のみならずこんにちの我が国文化界のもっとも期待を寄せるところである。このような状況を踏まえ、国の重要無形文化財「組踊」を中心とする沖縄伝統芸能の保存振興と伝統文化を通じたアジア・太平洋地域の交流の拠点となる国立劇場を設立することが必要である¹⁷⁾。

このような観点から、同劇場は沖縄の伝統芸能に関わって、1 組踊、琉球舞踊、琉球音楽等の公開（公演）事業、2 組踊の立方・地方の伝承者の養成事業、3 調査研究、資料の収集、公演記録の作成および展示、公開、4 伝統芸能を通じたアジア・太平洋地域等との交流事業など、マクロで長期的な視野で、意欲的な取り組みを行おうとしている。また、資料展示室での展示活動、芸能関係資料のレファレンスルームの設置、「友の会」組織による一般の芸能愛好者の獲得と拡大、児童生徒の組踊鑑賞会など若年層への普及活動、過去のフィルムを上映する公演記録鑑賞会やバックステージツアー、研修生の成果を無料で披露する発表機会、メールマガジンの発信など、従来の「伝統芸能」のイメージとは異なる斬新な取り組みが行われている¹⁸⁾。

以上のように「劇場」や「公演」を足場とする「外にいる他者に見せるための芸能」とは異なり、民俗芸能は、集落に根ざした祭祀や地元信仰、伝統行事などと結び付いて発展した「神への儀式や集落内の人たちが空間と行為を共有するための芸能」と言えよう。民俗芸能が地域にどんな形で根ざしてきているのか、公民館などの社会教育がその復興・振興に果たしてきた役割と合わせて、4で取り上げてみたい。

この他の伝統芸能を支える沖縄の社会関係基盤としては、さまざまな機関・組織・活動などが存在するが、ここでは学校、全島の行事、テーマパークをあげておきたい。沖縄の学校では、全体として、伝承文化を教育に取り入れようという姿勢が顕著である¹⁹⁾。とりわけ、エイサーは、沖縄のほとんどの小学校で運動会に採り入れられており、衣装や太鼓などを備品としてもつ学校も少なくないようである²⁰⁾。これらに加え、1955（昭和30）年から毎年、「旧盆の役目を果たした各地の青年達が、自分達の演舞を披露する晴舞台」²¹⁾として「全島エイサーまつり」が行われ、沖縄市の主催で、代表的なエイサー青年会の結集の機会となっている。これは、民俗芸能の披露と観光客の誘致が結びついた事業として定着してきたものと思われる。また、沖

縄の伝統的な生活や民俗芸能、伝統工芸などをアピールする事業がテーマパークの形で結実し、プロの芸能集団などによるエイサーや空手などの演舞なども行われている²²⁾。

3 伝統芸能の「継承」の場や機会と支援体制

では、人々はこのような「芸能」に関わる「知」をどんな機会に、いかにして自らのものとしてきた（いる）のか。言い換えれば、そのような「知」は、どのように他者や次代に「継承」されようとしてきた（いる）のだろうか。戦後、沖縄の伝統芸能は主に、

- ① 研究所や道場で、流派ごとの「芸道」として
- ② 青年会など地域に根ざした活動や公民館などを拠点とした「村遊び」として
- ③ 学校での教育活動（授業、行事、クラブ活動）の一環として

などの三つの領域で展開されてきたと思われる²³⁾。

それらに対し、比較的近年になってから、

- ④ 大学での専門教育の一環として（沖縄県立芸術大学「琉球芸能」専攻）
- ⑤ 「国立劇場おきなわ」の伝承者養成事業として
- ⑥ 習い事の「教室」やカルチャーセンターの「講座」として
- ⑦ その他（例えば、プロの芸能集団の稽古など）

というような新たな継承の機会が生み出されている。

これらの様々な継承の機会に加えて、沖縄の場合、継承活動を側面から支援するような息の長い民間の取り組みがあることが重要と考えられる。特に①の「芸道」に関わって、大手新聞社による古典芸能コンクールがある。例えば、琉球新報社は1966（昭和41）年、「琉球古典芸能の正しい継承と芸能文化の発展に寄与すること」を目的に、「琉球古典芸能コンクール」を創設している。同コンクールは毎年夏に行われ、新人部門、優秀部門、最高部門から時間をかけた厳正な審査で選ばれた合格者が、秋の「芸能祭」に出演するものである。第41回目を迎えた2006（平成18）年度には、舞踊、歌・三線、箏、太鼓、笛、胡弓の6部門で1347人が応募し、うち684人が合格した。「コンクールで育った多くの舞踊家、演奏家の皆さんが第一線で活躍し、沖縄の伝統文化の発展に寄与している」（琉球新報社社長比嘉辰博²⁴⁾）など、伝統芸能の技能の継承に果たす役割は決して小さくない。

このような「次の担い手を育てる」発想は、「国立劇場おきなわ」の伝承者育成事業²⁵⁾にも具体化されている。同劇場顧問大城學は、「国立劇場おきなわ」での「自主公演の在り方」について7項目を提起しており、その中で、「演じ手」については、可能な限り多くの芸能家に出演の機会を与えるとともに、若手の出演や世代間の交流ができるような配役を考えるべきことを提起している。のみならず、「観客にわかりやすくするよう努め、伝統芸能を親しみやすいものに」することで、次代の観客を育てることも視野に入れている。

4 沖縄県南風原町における民俗芸能交流会の取り組みと社会教育

ここでは、民俗芸能について、公民館を中心とする社会教育がどのような役割を果たしてきたかを、南風原町の取り組みを手がかりに見ておきたい。

（１）南風原町の戦後と社会教育

沖縄県島尻郡南風原町は、沖縄本島南部のほぼ中央に位置し、那覇市に隣接する町である。戦後の南風原町は、畜産を中心とする農業、織物などの生産に加え、近年は工業の発展、企業の誘致などで発展してきている。1908（明治41）年に11字で出発した南風原村は、1980（昭和55年）には町制に移行して16行政区に、2005（平成17）年度以降は19行政区を数え、人口は2007（平成19）年12月時点で34,083人を有している²⁶⁾。

この地域は沖縄の中でも、第二次世界大戦時の戦災被害がことのほか大きかった地域の一つである。沖縄戦で南風原地域は、1944（昭和19）年10月の10・10空襲、1945年3月以降の艦砲・空襲、首里攻防時の米軍の上陸路での戦闘、首里陥落後の南部撤退における戦線南下時の戦闘、と4段階で被害を受けたとされる。このように空襲、艦砲、地上戦が重なった結果、戦後焼け残った家は1566戸中17戸にすぎない²⁷⁾ という想像を絶する状況に至った。敗戦後に村民が「焼け跡になった自分のシマ（集落—引用者）を眺めたとき、『呆然として声もなかった』という証言が数多く残²⁸⁾」されているという。

1946（昭和21）年に南風原村役場が再建されると、村民たちも米軍の収容所から徐々に帰村し、共同作業で各字の再建に努めた。住民の住まいと同時に着手されたのは、公民館（ムラヤー、あるいは字事務所）であり、これが「字の生活を支える中心となった」とされる。天幕がトタン屋根、または茅葺きの戦後初代のムラヤーが46年から47年にかけて各字につくられた²⁹⁾。また48年に行われた戦後初の村長選挙では、ムラヤー前の広場が演説会場となった。各字では、公民館再建のための視察にもでかけるようになり、1953（昭和28）年に与那覇で鉄筋コンクリート平屋のムラヤーが建設された後、60年代には改築が進んだ。

どこの字でも「コンクリートを練ったり打ち込んだりする作業を字の人が行っていた」と言われるように、公民館は行政施設という以前に、人々が生活する「字」の拠点でも共有財産でもあったと言えよう。1960年代に電話が最初に引かれたとき、公民館の電話を使っていた人が数多くいたとの指摘もあり、「高校進学のためなら公民館を無料で使用させる」（1965年、字山川）との記録が残っている³⁰⁾ など、公民館は人々の生活にとって、欠かすことのできない身近な存在であったと思われる。

また婦人会や青年会などは、戦後の比較的早い時期に復活・組織されている。1947（昭和22）年8月に南風原村婦人会（会長：宮城妙子）が、同11月に南風原村青年連合会（会長：中村義永）が発足した。婦人会は結成当時、衛生を重視した掃除巡回を活動の中心としたが、後に、裁縫講習・料理講習会、健康優良児選奨の赤ちゃんコンクール、50年代からは生活改善グループと連動した講演会、余興などの活動を行っている。青年会は、自警団を結成して村の治安維持に努めるなど、活動を始めた。さらに、1952年4月には、沖縄初の南風原村農業協同組合婦人部が設立されるなど、南風原地区は戦後、地域に根ざした社会教育的な団体組織が活発に展開された地域だったと言えよう³¹⁾。

（２）南風原中央公民館の開館と伝統芸能

1978（昭和53）年、沖縄県南風原村（現・南風原町）に南風原村立中央公民館が設置された。

糸満、読谷、玉城に続き、沖縄県で4番目に創設された公民館である。館長には、照屋孚喜が就任し、初代の公民館主事として、離島で小学校教員をしていた社会教育主事の大城和喜が呼び戻されて赴任した。

南風原地区は元来、集落ごとの民俗芸能が盛んな地域で「十五夜には毎年ムラ人が集って芸能を楽しんで」いた。また綱引き³²⁾などの伝統的な地域行事が脈々と続いてきた土壌であり、そのネットワークも強力なものがある。だが、太平洋戦争が激しくなるにつれ、その芸能も禁止された。南部戦線の敗退と激烈な爆撃で約4割の村民が犠牲になり、地域も人心も荒廃した。1946(昭和21)年夏、ムラの人々は「収容所や戦地、疎開先から荒れ果てたふるさとに帰り、我がムラの再建にとりかか」ったが、「その再生のスタートが芸能」であった。「親兄弟、友人、親類を失った悲しみを乗り越え、お互いの無事を確認し合いながら、焼け野原に天幕を張って"長者の大主"を演じた」³³⁾という。

とはいえ、「本土」では戦後復興がめざましく高度経済成長のただ中で「戦争」が人々の記憶から遠ざかりつつあった。他方、沖縄の人々は、容易に癒えることのない戦争の深い傷跡と占領下の生活、返還後の厳しい経済状況の中で、「沖縄らしさ」は、時としてマイナス・イメージをとめない、ネガティブなものとして受け止められる傾向さえあったようだ。そのためもあり、地域に根ざした多くの民俗芸能は、戦後もずっと生活に埋もれたままであった。とはいえ、人々が徐々に生活を再建する中で、人々は、「ウチナーンチュ」としてのアイデンティティをどう再構築するかという課題に直面せざるを得なかったと思われる。

公民館³⁴⁾の創立にあたり、このような南風原地域の状況は、どのように受け止められていたのだろうか。公民館主事の大城は、村人たちが自らの足場を再確認し、再び元気を取り戻していくための「触媒」として、芸能活動に注目したのだという。大城の目には「芸能の火は、それでもまだ村人たちの心の中にひっそりと燃えている」ように映っていた。「それを活動に結びつけるような契機や力」を提供するのが、公民館の役割であり、社会教育の役割だと考えたのだという³⁵⁾。大城は早速、沖縄の伝統芸能に造詣の深かった、県文化課主幹の宣保栄治郎、町文化財保護委員の野原廣亀らに相談し、公民館の活動方針に芸能活動を取り入れることとなったのである。

(3) 民俗芸能交流会の誕生

1979(昭和54)年7月31日の夕刻6時半から、中央公民館において「第一回芸能鑑賞会」が開催された。初回の趣旨として、「郷土芸能を鑑賞することにより村の伝統芸能の進行を計り、ふるさとを愛する心を育てよう」³⁶⁾との呼びかけ文が掲げられた。大城は、南風原村の人々に「芸能活動をやりましょう」と直接呼びかけることはせず、それより、「外から刺激を与えて村の人の気持ちを揺り動かすこと」を重視したという。

そのためには「最高で一流の芸能」をとの趣旨から、宮城美能留舞踊研究所と高教組の組踊部会、地元兼城の村踊り保持者に公演を依頼した。「プロと一緒に経験を積んでもらおう、という廣亀先生の思いやりで」、地謡はすべて地元の村人が登場することになったのである。この廣亀先生とは、喜屋武伝統芸能保存会会長をも務めていた野原廣亀である。第一回のプログ

ラムは、組踊「二童敵討」（宮城）と「執心鐘入」（高教組）と民俗芸能の「揚作田」と「下り口」（兼城）であった。当日の会場の様子について、『琉球新報』は「愛郷心の育成図る」とのタイトルで、以下のように伝えている。

会場には約六百人の村民らが詰めかけ盛況。その大半がお年寄りたちで、伝統芸能に対する関心の高さを見せつけた。組踊、踊りと盛りだくさんの曲目が披露されたが、圧巻はなんといっても宮城美能留氏自身が出演した組踊「二童敵討」。宮城氏は阿摩和利役を演じたが、その格調高い演技に観衆はうっとり。また、その他の出演者もプロの腕前をいかんなく披露、観衆は伝統芸能のだいご味を堪能した³⁷⁾。

このような「鑑賞会」は大城主事らの意図通り、南風原の人々に伝統芸能への新たな関心を呼び覚ました。大城はこの時の様子を「代表的な組踊が二題も演じられ、満員の観客は久々に観る組踊りに圧倒され大満足であった。それに兼城が演じた二つの二才踊は、プロの味と一風違うのびのびとした大らかさに、地方の芸能の良さを確認した瞬間であった」³⁸⁾と回想している。地元の人々の村踊りがプロの演技に引けを取らないばかりか、プロに求めても得られないような、地域伝承芸能独自の、生活に根ざした伸びやかさや力強さを備えていることを、聴衆や関係者は実感として受け止めたのだと思われる。

これを受けて1980（昭和55）年10月12日、第二回は「鑑賞の夕べ」ではなく「民俗芸能交流会」と形を変えて行われた。趣旨も「古くから伝わる各地の民俗芸能（村踊り）の交流を通して、町（の）民俗芸能の振興をはかり、村に生きる誇りと喜びを培い、ふるさとを愛する心を育てる」と改められ、以後、この趣旨が一貫して掲げられることになる。第二回の演目は、舞方（2種類）、獅子舞（3地区）、「長者ぬ大主」、アヤグ、ファイファー棒など13種目であり、うち8演目は南風原町から、その他は玉城、勝連町、大里村、沖縄市首里などの地域から演者を招待しての上演であった。

この模様は1980年10月18日付『琉球新報』に「13演目に盛大な拍手」という記事が、写真つきで掲載されている。同記事は、「この日は台風の接近で開催が危ぶまれたが、関係者の強い熱望で予定通り開催にこぎつけた。あいにくの天候にもかかわらず、会場には地元住民をはじめ芸能不安ら約四百人が詰めかけ、盛況だった」と書かれている³⁹⁾。

大城は、この時のことを「・・・暴風雨であった。準備万端であったのでハタと困ってしまった」が、照屋館長の「君に任せる 責任は私が取る」との言葉と、出演予定の勝連町の平安名青年会からの南風原にマイクロバスで向かうとの電話によって実施を決めた。早速、「出演者に確認の電話を入れ、各字公民館にはマイク放送で開催の旨の広報をお願いした」という。大城はこの時の熱気を「激しい暴風雨の中、続々町民が押し寄せてきた。外は暴風、中もそれ以上に熱気で荒れ狂った」と表現している³⁹⁾。その時の町民の「ありがとう ちょうど台風し 退屈そーたん いい考えせーさ」との言葉は、悪条件にめげなかった関係者の努力が、見事に町民のニーズを捉えていたことを示唆している。

(4) 南風原町の民俗芸能交流会25年の取り組み

1978（昭和53）年に開催された「第一回芸能鑑賞会」、翌年の「第二回民俗芸能交流会」（「交流会」としては初回）以降、南風原町の民俗芸能交流会は、2004（平成16）年2月の第25回まで、四半世紀にわたって続けられた。前半は、南風原村（当時）立中央公民館を拠点とした事業として、1990（平成2）年の第13回目以降は、新設の南風原文化センターに事務局に移し、文化センターの主催により実施された。この25年間の前半期は、民俗芸能交流会の試行・定着期、後半期は民俗芸能交流のあり方の模索・発展期と大きく分けることができよう。以下、各々の時期について、概観したい。

1) 第1回～第12回 ― 民俗芸能交流会の試行・定着期

前述のように、民俗芸能交流会は、1978年に民俗芸能「鑑賞会」として出発し、第2回から本格的な「交流会」として開始された。同交流会は初回から各新聞でも取り上げられ、関係者や一般の人々の注目を集めていった。第1回から第12回までの民俗芸能交流会の様子を伝える新聞記事はすべて、報告書『沖縄の民俗芸能―民俗芸能交流会12年』の中に収められている。以下、その大小の見出しを通して、この前半期が南風原の人々にとってどんな意味をもっていたのか、手がかりを得たい。なお、各新聞名は便宜上、省略する。

- 第1回 「愛郷心の育成図る 村公民館 郷土芸能鑑賞の夕べ」『『執心鐘入』に人気』
- 第2回 「13演目に盛大な拍手」『民俗芸能交流』
- 第3回 「地域の目覚め」『多彩な出し物にわく』
- 第4回 「"村踊り"が一堂に」『四市町村代表が熱演』
- 第5回 「息づく芸能の"原点"」『熱演で観衆を魅了』「伝統の保存と振興 『高山敵討』を披露」『芸能の真髄を披露』
- 第6回 「『村踊り』の保存と振興図る」『各地の伝統芸能を披露』
- 第7回 「民俗芸能で村興し」『南風原町の催し定着 各地の演技者が交流会』「民俗芸能に観客うっとり」『南風原町の交流会 各地から参加、盛況』
- 第8回 「半世紀ぶりに十五夜夜遊び 南風原の組踊『花売りの縁』が復活」『南風原町神里区で十五夜遊び』「51年ぶりに組踊『花売りの縁』上演 勇壮な棒術や舞踊も披露」『演目に地域性』「変化に富み魅了」『芸能で村おこしを』「勝連、多良間と村踊り交流会 ユニークな試み」
- 第9回 「南風原町兼城 迫力満点の演技」『組踊を復活上演 『すごいぞ』拍手の渦』「『組踊義臣物語国吉のひゃー』52年ぶりに復活」『見る人も演じる人も感激 "おらが村の芸"に沸く』「よみがえった村踊り 南風原の芸能交流 大城學」『頼もしい民俗芸能の復活伝承と創造 野原廣亀』「多彩な舞台、迫る熱演 南風原"村あしび世代"沸く」『華やかに民俗芸能の夕』「獅子舞 京太郎など多彩に 見事な"ふるさと芸"に沸く」
- 第10回 「第10回民俗芸能交流会によせて 大城学」『10年目を迎えた民俗芸能交流会 す

でに10市町村32字招く 町民に楽しみと満足感」「伝統舞踊や組踊りたんのう 南風原町で民俗芸能交流会」

第11回 「組踊『姉妹敵討』など披露 各地の芸能招き交流会」「南風原町本部 53年ぶりに組踊を復活 十五夜遊びで盛大に」「好評です 民俗芸能交流会 3市町村の踊り招く文化継承、発掘にも弾み」

第12回 「舞台華やかに勇壮に 民俗芸能交流会 観客を魅了」「各地の村踊り一堂に」「勇壮、素朴な演武 ファン詰めかけにぎわう」

では、交流会の様子は、これらの新聞記事の中でどのような形で取り上げられ、論評されていたのか。いくつかの例を見てみよう。第3回交流会については、『沖縄タイムス』（1980年10月13日号）「今晚の話題」欄で「民俗芸能交流」で紹介されている。そこでは民俗芸能の意義が、以下のように述べられている。

民俗芸能とは、民衆が久しい間の生活体験を通じて体得してきた知識や、抱き続けている人生観、社会観などを情緒的に表現したものであろう。南風原町では、埋もれた民俗芸能を掘り起こし、さらに他町村との交流も深めながら、地域の文化を見つめなおしたいという。昔は神をまつって五穀の豊穡（じょう）を願い、疫病追放を祈って信仰の庭におこったはずの民族芸能が、こうして現代社会に結びつくことに、一種のたのしさを覚える。／催しのために、さる7月から保持者の説得にあたったという。しかし、主役である演者も、だんだんと年をとり、若い人への継承が最大の課題とも言われている。その面での行政的援助が、今必要と思う。（風）

第4回交流会の報道に際しては、1981（昭和56）年10月5日『沖縄タイムス』が「地域の目覚め」と題した次のような記事を掲載している。

なかでも人目を引いたのは、南風原町津嘉山の「チラー小舞い」という、どちらかといえば、コッケイ踊りのような芸であった。・・・

解説によると、この踊りは昭和二年の「村芝居」で演じて以来、公開したことがないという。五十三年ぶりの上演だが、出演も七十歳の老人二人であった。／もともと民俗芸能は、民間の信仰行事によってできたものである。神をまつって健康を祈り、長命と五穀豊穡を願い、疫病の退散を乞い願いつつ、人々は舞い、踊った。したがって古くは信仰の庭で演じ、継承していったものであり、当然のことながら閉鎖性が強かったと考えてよい。それに一方では、廃藩以後に首里から地方へ散った士族たちによって、舞踊や組踊、狂言などが伝わって、地方に“根”を張った。／この二つの流れが、今日の「民俗芸能」として村々に残っていると考えるとよいだろう。それを引き出して交流するのが今回の目的だが、一町村として毎年各地の民俗芸能を一同に集めて公開する企画も珍しい。地域の新しい目覚めではないだろうか。（風）

さらに、沖縄県文化課の宣保栄治郎は「南風原町の民俗芸能交流会の業績」「手作り文化の姿勢 遠からず民俗芸能のメッカに」(『沖縄タイムス』、1985年11月20日)との見出しで論評を書いている。そこでは、民俗芸能が直面していた状況と交流会の意義がリアルに描かれている。

交流会と銘うったのは、これまでの民俗芸能は文化的に評価されない場合は、徹底的に自己卑下に陥るか、さもなければお国自慢のあまりよその芸能を見下げるといふ、始末におえない状態にあるのが常である。南風原町の場合は前者の方で戦前は、あれほど盛んであった村遊びが戦後は廃れてしまい、ただ老人の昔話やためいきのなかから若者たちは伺い知るばかりであった。娯楽といえはすぐ近くに那覇をひかえており無理もないことであった。けれども中央公民館の完成を機にその風潮は一変したようだ。南風原の文化は南風原の人の手でさらに他の地域の民俗芸能を守っている人たちとも手を取り合って、というのがこの催しの目的である。

また沖縄県立博物館学芸員大城學も、1988年10月7日付『琉球新報』において、交流会が人々の意識変革に果たした役割について次のように述べている。

他の市町村の民俗芸能を招待し、演じてもらうこと(つまり、交流)は、それによって町民に刺激を与え、南風原の民俗芸能、村踊りを復活させようということであった。結果として、ムラの祭りや芸能は古くさく、恥ずかしいものではなく、それは我がムラの誇りであり、財産なのだ、という具合に、町民の価値感(観)の大きな転換があったようである。

このように、交流会での村外との交流を通して、村人たちは、地元の民俗芸能に改めて「出会う」ことになる。自らの文化的背景の中核的な要素を為し、好むと好まざるとにかかわらず、自己形成のプロセスに影響を及ぼしてきた民俗芸能の意味を問い直し、その意義を見つめなおす機会として、交流会が機能したとみなすことができよう。

さらに、南風原町が、この民俗芸能交流会を大きな契機として、また、原動力として、1991年までの段階でも64演目の民俗芸能の復活を果たしている点も、注目される。たとえば、南風原町喜屋武区の組踊『本部大主』が55年ぶりに復活上演されたことも、新聞で大きく取り上げられた⁴¹⁾。それ以外にも、芸能復活の様子を伝える新聞記事も数多く書かれている。例えば、次のようなものである。

「みやぐすく祭り 組踊を120年ぶり復活上演 子どもの体験発表も」「組踊 『国吉ぬひゃー』を上演、南風原町宮城区が120年ぶり復活、お年寄りたちも大満足」

「民俗芸能 各地で復活相次ぐ 地域活性化への狙いも」「61年ぶりに組踊を上演 南風

原町津嘉山」「八月十五や大遊びも復活 区民総出で伝統行事楽しむ」「組踊61年ぶり復活
南風原町津嘉山の青年たち」「もう絶やしません・・・お見事、村芝居の目玉に」

「字本部は53年ぶりに組踊 各区で10年間に50余も復活」「53年ぶりに組踊復活 伝統芸
能を継承 若者が見事に演じる」

大城學は先の『琉球新報』記事において、第10回交流会に寄せて、南風原町が計49演目の民
俗芸能（組踊5、狂言9、舞踊・棒・獅子舞35）の復活を実現したことに言及しつつ、以下の
ようにその意義を評価している。

四十九演目の演目を復活上演したというのは、大へんなエネルギーである。そもそも民俗
芸能（ムラの芸能）は、ひとりで演じられるものでもないからだ。常にムラ人が集団で動い
ているのである。つまり、民俗芸能は、その地域の人びとの生活集団の集団的表現—それは
音楽、歌、舞踊、演劇であったりするで、集団で伝承してきたものである。だから、その地
域の人びとの心が一つにならなければ、ムラの祭りや芸能は、やっていけないということに
なる。祭りや芸能を行うことは、ひいてはムラづくり、まちづくりにも大きな役割を果たす
ことになる。

このように、民俗芸能が「その地域の人びとの生活集団の集団的表現」と捉えられている点
は、注目すべきである。さらに大城は当面の課題は「継承」であるとの問題意識から、次のよ
うな認識を示している。

民族芸能の稽古風景をみると、ムラの長老たちをかしらに、子どもまで参加して行われて
いる。先輩が後輩に技をきちんと伝授し、あるいは芸能についての話を語って聞かせる。ム
ラの文化や歴史まで話が及ぶこともある。また、手先の器用な者、絵の上手な者がおれば、
彼らは芸能の道具作りに精を出す。婦人会や公民館の役員らが、料理をこしらえ、飲み物を
用意して、出演者の労をねぎらう。稽古の様子をみしてくれるムラ人もいる。そして、本番の
日は、ムラ人全員が参加して楽しんでいる。まさに、心をひとつにしているのである。芸能
や祭の盛んな地域は、活気づいている、といわれることがある。

2) 第13回～第25回 — 民俗芸能交流の模索・発展期

『沖縄の民俗芸能』は、第12回の実施を区切りとしてまとめられたものである。民俗芸能交
流会の事務局は、13回目からは、中央公民館から南風原文化センターへと移ることになる。ま
た、大城和喜中央公民館主事は、南風原文化センター長に就任した。それを契機に、第13回は
それまでの12回を振り返る機会として、1991（平成3）年11月23日、「民俗芸能 シンポジウ
ム&交流会～ムラ踊り、その継承と形～」という形で開催されている。当日のプログラムは、
第一部はシンポジウム「村踊りの現状とその継承」、第二部は「交流会：民俗芸能交流会13年

の感謝会」という二部構成であった。

第一部の司会は、前掲の大城學が務め、「シマ⁴²⁾の芸能を語る人」として、喜屋武伝統芸能保蔵会会長野原廣亀（南風原町）、長浜伝統文化保存会長浜真勇（読谷村）、久志芸能保存委員会棚原繁男（名護市）、塩川組座所属友利哲市（多良間村）が登壇した。また沖縄県教育委員会文化課課長宣保榮治郎が「助言」を行った。このシンポジウムの議論はかなり重要な意味をもつため、後日改めて検討したい。

後半期については、『沖縄の民俗芸能（1）—民俗芸能交流会12年—』のようなまとまった記録集は残されていない。だが、入手できたパンフレットなどを見ると、毎回、何らかのテーマを設定する、対象者や演目を絞る、国際交流を取り入れる、などの工夫や意欲的な取り組みが見られる。前半期で地域の人々の中に呼び起された民俗芸能の灯を、どのように継続的・発展的なものにしていくか、という主催側の問題意識と試行錯誤の姿勢がうかがえる。第25回のパンフレットに掲載された「第1回から24回までの出演演目一覧」⁴³⁾などを手がかりに、主だったものを挙げてみよう。

第13回 シンポジウム&交流会「ムラ踊り、その継承と形」

第15回 「棒術の広がり」

第16回 組踊公演 南風原町芸能協会組踊部と伊是名

第17回 「地方に生きづく組踊」 南風原町芸能協会組踊部と名護

第18回 「台湾・琉球 大地の歌声～馬蘭アミ民俗歌唱団のみなさんを迎えて～」

南風原町津嘉山村民、草笛奏者、琉球大学八重山芸能研究会、アミ民俗歌唱団競演

第19回 「子どもが舞う村踊り～村あしび、その継承と形～」

第21回 「南風原町指定文化財（民俗芸能）」

第22回 台湾、タイ、インドネシア、フィリピンなどの踊りや演奏を招いた催し

第23回 「第2回芸能比較鑑賞会・村の踊り・まちの踊り」

第24回 「村の踊り・町の踊り・毛あしび歌」

第25回 「フォーラム 村遊び（むらあしび）の力 ～ムラと芸能と青年と～」

このように、第15回は棒術、第16・17回は組踊、第24回は毛あしび歌、と特定の芸能に焦点を当て、第21回は南風原町の芸能で指定文化財とされる計14演目を上演している。また第19回は次代の継承者である子どもの芸能に焦点を当てた。同回では、南風原町長金城義夫が開会にあたり「民俗芸能に対する子どもたちの意識も高まりつつある昨今、各地域に脈々と受け継がれてきた伝統の今後の更なる継承について考えようと、今回の民俗芸能交流会は各々の村に伝えられている村あしびを中心に、それぞれの芸能がどのように子供たちに伝承・継承されてきたか」⁴⁴⁾をテーマとしたと述べている。演目は、舞方棒、「長者の大主」をはじめ、獅子舞・棒術、ヤリク節など12演目におよび、南風原高校郷土芸能部（「上り口説囃し」）と南風原高校郷土文化コース⁴⁵⁾（「鳩間節・古典音楽」）も演技を披露した。

また第23回について詳細は確認できていないが、記録によれば、同じ芸能を、南風原の町民

による「村の踊り」と研究所や道場の「まちの踊り」で共演（競演）するという試みが行われたようである。例えば、「揚作田節」という演目は、南風原町照屋の人々と柳清本竜松之仲本末子琉舞研究所の両者によって演じられている。6演目中、5演目がこのような形で構成されており、大変興味深い⁴⁶⁾。

さらに、第18回と第22回は、民俗芸能における国際交流の取り組みである。第18回交流会では、台湾の台東氏の馬欄アミ族を迎えている。これは、明治学院大学の竹尾茂樹教授の尽力によるものとされる。大城和喜センター長はこの時の敬意と様子を、以下のように回想している。芸能を通じた国際交流の意義をよくあらわしていると思われるので、引用しておきたい。

初めて外国の歌と踊りの公演という事で、アミ族の皆さんに会うまでは緊張もしたが、会ってみると沖縄の人以上に親近感を覚える優しき人々であった。見栄も飾りもない素朴な民族であった。／彼等の歌の特徴はその澄み切った高温にあり、踊りは与那国の巻踊りと共通するものがあり、とても素朴で歌と踊りの（も？）原始的であった。それだけに胸を打ち心にひびくものがあつた。／前日、本番、翌日と彼等と飲み語り語り踊り明かした。遠方から同胞を迎えたような別れるのが惜しい人々であった。彼等は日本の植民地時代を生きた人なので、日本語に精通していた。だから意志（思）の疎通に問題はなかった。／後日、私たちは台湾を訪ねた。台東市の彼等と再会し「旧交」を深めた。

植民地支配という重苦しい歴史を象徴する「日本語」が両者の会話を容易にした、との皮肉な「幸運」があったとはいえ、このエピソードは、民俗芸能という共通の自己表現手段の意味を改めて考えさせるものである。民俗芸能の交流が、南風原の人々とアミ族との、初対面にもかかわらず「飲み語り話し踊り明か」すような「親近感」の橋渡し役となったことは、疑い得ない。このような文化圏の共通性と相互交流についても、探究すべき課題が残されていると言える。

さらに、四半世紀を数え、南風原町の民俗芸能の大きな節目を迎えた第25回民俗芸能交流会は、2004（平成16）年2月22日に実施された。当日は、「芸能研究家」として前掲の宣保榮治郎が講演「芸能とムラと青年と」を行った後、「25年の歩み」をスライドで振り返った。さらに「村遊びの力～ムラと芸能と青年と」と題して行われたフォーラムでは、進行を大城和喜センター長が務め、登壇者は南風原町宮平青年会長中村直人、南風原町喜屋武青年会長赤嶺太、糸満市真栄里青年会長伊敷利一、浦添市内内間青年会長城間大耕の4人であった。また、宣保と佐賀大学教授上野景三が、助言・提言を務めた。本フォーラムも第13回シンポジウムと同様、南風原町および沖縄にとっての民俗芸能交流会の意義と現代的課題を提起するものとして注目される。同シンポジウムと合わせて別稿で検討を行いたい。

注

- 1）平成17-19年度科学研究費（基盤（B）代表者：渡邊洋子）の助成による共同研究プロジェクトであり、「伝承・習い事文化」研究会（代表：渡邊）の活動を通して、本研究調査に取り組んでいる。

- 2) 「伝承・習い事文化」研究会では、数度の現地フィールド調査を経て2007年6～7月、三府県の全学校(小中高等学校、特別支援学校)を対象に、「学校教育における地域文化伝承への取り組みに関わる調査」を実施した。合わせて注19を参照。
- 3) 本稿での「伝統」は、エリック・ホブズボーム『創られた伝統』(1992年、紀伊国屋書店)における伝統の理解、すなわち「伝統とは不変のものでなく、時代時代を生きる人々の取捨選択により次代に伝えられていくもの」だとの考え方に依拠するものである。
- 4) 同調査は、2001年に続いて2回目である。2006年11月9日～12月11日に県内20歳以上の男女2014人を無作為抽出し、直接面接法で行われた。有効回収率52.83%。『2006 沖縄県民意識調査報告書』、琉球新報社、2005年、28～29ページ。
- 5) 同報告書、15～16ページ。
- 6) 同、28ページ。沖縄文化を「誇りに思う」との回答は、40代96.3%、30代が95.8%、20代で94.7%を占めた。
- 7) 例えば、「衰退したものを復活させる」取り組みは、4で見る南風原町の取り組みが代表的と言えるが、「なかった所に新たに創り出す」ものとしては、具志堅青年会が戦後、地元になかったエイサーを起こした取り組みなどが挙げられる。後者は2006年12月25日の具志堅公民館での聞き取り調査(具志堅区長上間宗男氏、同町議会議員仲宗根宗弘氏ら)の際に聴取した。また台湾の伝統的人形劇を沖縄文化と結びつけ、新たな沖縄の伝統文化を生み出そうとする「人形的劇団かじまや」(代表: 桑江純子氏)の取り組みなども、特筆される。
- 8) レイヴとウェンガー『状況に埋め込まれた学習』(産業図書、2002年)。ただ、レイヴとウェンガーの議論が、日本ないし東アジアの伝統芸能理解に十分な吟味なしに適用され得るのかどうかは、検討を要する。
- 9) 中国から琉球国王を任命するため、王の印である皮弁冠・皮弁服と、造船技術や沖縄にない産物を携えてやってくる使者で、500～600人程度で沖縄を定期的に訪問したとされる。
- 10) 「はじめに」『沖縄芸能の可能性』沖縄国際大学公開講座14、沖縄国際大学公開講座委員会、2005年。
- 11) 以上の引用は、玉城節子「琉球舞踊と玉城盛義」『沖縄芸能の可能性』45～46ページ、狩俣憲一「琉球芸能の可能性」同書、105ページ。また2006年12月23日「伝承・習い事文化」研究会での三線演奏家新城亘氏からのレクチャーも参考にした。
- 12) 同前書、46ページ。
- 13) 同前書、105ページ。
- 14) 組踊あるいは組踊(どちらもクミオドリ、クミウドゥイ)とは、「沖縄あるいは琉球の古典劇(この称号も同地で行われた)であり、能(能楽)そのほかの影響を受けて成立した芸能である」という。1719(享保4)年に完成され、「それまで長い間に琉球で発達してきた歌舞音曲を総合的に取入れ、一つの物語を持つ戯曲として、人間の演ずるために組み立てたもの」である。畠中敏郎『組踊と大和芸能』ひるぎ社、1994年、29～31ページ。
- 15) 大城學「国立劇場と沖縄芸能の可能性」同前書、17ページ。
- 16) 86年には県知事や教育長、県議会などが大蔵省、文部省(当時)、文化庁や沖縄開発庁などの省庁に働きかけ、87年には国や県指定無形文化財保持者団体の伝統組踊保存会など関連6団体の要望書が提出されるなど、「国立組踊劇場(仮称)」の設立への官民一体の運動が展開された。同前書、17～24ページより。
- 17) 同前書、24～25ページ。
- 18) 「国立劇場おきなわ」の事業については以下のホームページを参照(2008年2月1日)。
<http://www.nt-okinawa.or.jp/index01.html>
- 19) 「学校教育における地域文化伝承活動に関する調査」。「伝承・習い事文化」研究会が2007年6～7月に、沖縄、京都、新潟の1府2県の小・中・高等学校、特別支援学校を対象に実施したアンケート調査。同調査については現在、データを分析中であり、2008年6月に報告書を刊行の予定である。
- 20) 2007年12月21日、沖縄市立志真志小学校大城盛安校長先生談。

渡邊：沖縄における「伝統芸能」と生涯学習・社会教育

- 21) 2004年9月に実施された第49回全島エイサーまつりの解説より。
http://okinawa.rik.ne.jp/contents/okinawa/matsuri/eisa2004_01/index.html
- 22) 沖縄文化を取り上げた代表的なテーマパークとしては、琉球村、おきなわワールド、むら咲むらなどが挙げられる。例えば、おきなわワールドでは、残波太鼓の系統を引くプロのエイサー団真南風が、1日数回、エイサー、獅子舞、空手などを披露している。
- 23) これらの三つの領域で展開されてきた芸能の詳細な考察は別途、行いたい。
- 24) 比嘉辰博「ごあいさつ」『第41回琉球古典芸能祭』（プログラム）、琉球新報社、2006年、3ページ。
- 25) 国立劇場おきなわでは「研修生を公募し、充実した講師陣を編成し、体系的なカリキュラムのもとに、組踊伝承者養成事業を実施している」。18) で挙げたホームページを参照。
- 26) 南風原町役場ホームページ（2008年2月1日参照）より。
[http://www.town.haeburu.okinawa.jp/hhp.nsf/\(wvdai\)/063D8223FA8C538C49257023000F02D5?](http://www.town.haeburu.okinawa.jp/hhp.nsf/(wvdai)/063D8223FA8C538C49257023000F02D5?OpenDocument)
OpenDocument
- 27) 『ゼロからの再建—南風原戦後60年のあゆみ』、(南風原町史 第7巻 社会文化編) 沖縄県南風原町、86ページ。
- 28) 同前。
- 29) 同、87～88ページ。
- 30) 同、13ページ、19ページ。
- 31) 同、10、ページ、18ページ。
- 32) 南風原町における「綱引き」の様相については、例えば、『喜屋武の綱引き』、南風原町伝統文化資料製作実行委員会、2002年を参照。
- 33) 中村清「ごあいさつ」『沖縄の民族芸能（1）—民俗芸能交流会12年』、沖縄県南風原町立中央公民館、1991年、2ページ。
- 34) 沖縄の集落（字）公民館と公立公民館については、小林文人・島袋正敏編『おきなわの社会教育—自治・文化・地域おこし』、エイテール研究所、2002年、第2章と第3章を参照。
- 35) 大城和喜氏談。2007年10月11日午後、南風原文化センター訪問時のインタビューから。
- 36) 『沖縄の民俗芸能（1）—民俗芸能交流会12年—』6ページ。
- 37) 『琉球新報』1979年8月2日付。
- 38) 大城和喜「民俗芸能交流会25年 掘り起した南風原の芸能 その足跡を顧みる」『なんぶ文芸』第3号（創立10周年記念特集号）、沖縄県南部連合文化協会、2005年9月、62～67ページ。
- 39) 「13演目に盛大な拍手」『琉球新報』1980年10月18日付
- 40) 「民俗芸能交流会25年 掘り起こした南風原の芸能 その足跡を顧みる」。
- 41) 「南風原町喜屋武区 区挙げて伝統芸能継承」『琉球新報』、1983年7月4日付。「55年前の舞台再現」『沖縄タイムス』同日付、以上、同前書、308、309ページ。
- 42) 「シマ」とは、人々が所属する集落共同体のことを指す。
- 43) 「第1回から24回までの出演演目一覧」『第25回民俗芸能交流会 フォーラム「村遊びの力」～ムラと芸能と青年と～』（パンフレット）、南風原町立南風原文化センター、2004年、28ページ。
- 44) 金城義夫「ごあいさつ」『第19回南風原町民俗芸能交流会 子どもが舞う村踊り』（パンフレット）、南風原文化センター、1997年11月23日。
- 45) 南風原高校郷土文化コースは、1993年に設置され、97年時点では専門科目として「琉球舞踊」「郷土の音楽」「古武術」が置かれていた。沖縄県高校文化祭郷土芸能部門に参加し、さらに第19回全国高校文化祭郷土芸能部門などに県代表として度々参加した。
- 46) 「村の踊り」と「まちの踊り」の違いについては、大城和喜南風原文化センター長へのインタビュー（2007年10月、12月）の中でも、「見せる」ことを目的とした芸能と、村人が自らの「内なるもの」を表現するための芸能の違いとして、再三言及されている。

表 1 南風原町が民俗芸能交流会で交流した市町村

1. 若衆こてい節	宮城美能留琉舞研究所	36. 獅子舞	宜野座字松田
2. 上り口説	〃	37. 舞踊「江佐節」	伊平屋村字前泊
3. 花風	〃	38. 舞踊「古見の浦節」	鳩間郷友会
4. 諸屯	〃	39. 棒術	具志頭村字安里
5. 二童敵討	〃	40. 獅子舞	勝連町字南風原
6. 執心鐘入	高教組組踊部会	41. 組踊「忠臣仲宗根豊見親組」	
7. アヤグ	玉城村字前川		宮古・多良間村字仲筋
8. 獅子舞	那覇市首里汀良町	42. 棒術	名護市数久田
9. 砂かち・大槍ぬ手	玉城村字奥武	43. 京太郎	宜野座村字宜野座
10. コッケイ踊り	勝連町字平安名	44. 天川	嘉手納町字野国
11. 上り口説	大里村字古堅	45. 舞踊「総掛け」	名護市字屋部
12. 獅子舞	浦添市内間	46. 舞踊「手間戸」	〃
13. 棒術	東風平町東風平	47. 久志の万才	〃
14. 打花鼓（ターファークー）		48. 狂言「稻摺節」	〃
	中城村字伊集	49. 棒術	名護市字波平
15. ファイファー棒	大里村字古堅	50. 舞踊「揚作田」	名護市久志区
16. 棒術	読谷村座喜味	51. 舞踊「スーリ東り」	〃
17. 谷茶前	知念村字安座真	52. 舞踊「久志ぬ女踊」	〃
18. 獅子舞	浦添市字勢理客	53. 舞踊「人形ガナシー」	〃
19. チクタルメー	読谷村字長浜	54. 舞踊「山崎のアブゼーマ」	
20. 組踊「高山敵討」	伊是名村字諸見		八重山民俗芸能研究会
21. 与那国の歌	与那国郷友会	55. 笠踊・鐘踊	〃
22. 上り口説雑子	読谷村字宇座	56. 舞踊劇「ユシグエー（寄鉄）」	
23. あかきな節	伊江村西江前区		玉城村字前川
24. 四手納節	伊江村東江前区	57. 獅子舞・ティンペー	
25. 荷取り	〃		具志川市田場
26. 門口池小堀節	〃	58. 舞方「棒」	東風平町字東風平
27. 来夏節	与那国郷友会	59. 砂川のクイチャー	
28. 棒踊り	〃		在沖・砂川クイチャー保存会
29. 宮古節	伊江村西江前区	60. ウスデーク	具志川市田場
30. 舞方	宜野座村字松田	61. 棒術「1人～5人棒」	
31. 舞踊「かなかき」	鳩間郷友会		佐敷町字津波古
32. 上り口説	伊平屋村字島尻	62. 舞踊「花蝶の舞」	知念村字知名
33. 棒術	伊平屋村字島尻	63. 舞踊「仲里節」	〃
34. 舞踊「鳩間中森」	鳩間郷友会	64. 舞踊「松竹梅」	〃
35. 八重瀬の万才	伊平屋村字田名		

出典：『民俗芸能シンポジウム&交流会～ムラ踊り、その継承と形～』、南風原文化センター、1992年3月、46ページ

図1 南風原町が民俗芸能交流会で
交流した市町村



